

ビバハウス便り NO.97 初夏の輝きに満ちて

2014年5月3日

ビバハウス 責任者 安達 俊子

長く厳しく、また例年にないドカ雪の今年の冬もようやくお別れの日々が来た。春一番は小さな福寿草の黄色から始まった。日当たりの良いところのレンギョも負けずにいっせいに黄色い小花をそろえてくれた。その下の地面には5本そろった赤いチューリップがけなげな姿を見せてくれている。「チューリップで町おこしを！」と町ぐるみで取り組んでいる「中湧別町」の皆さんから講演を依頼され、お土産に頂いたのを大切に育ててきたものである。その名のとおり、雪の下から白とピンクのつぼみをつけた「雪の下」も目に鮮やかだ。ビバを取り囲むヒバやオニコ(櫟)なども一気に緑を濃くし始めた。これこそが朝な夕なの自然の醍醐味だ。

季節の変化に負けないような若者たちの変化も次々に起こっている。この冬から私が理事も勤めている隣町仁木町の特別養護老人ホーム長寿園(森常明理事長)で週4日のアルバイトをしてきた若者は、園の方からの要請で、4月以降も引き続き継続して働くことになった。冬の期間はビバの車で送り迎えをしたが、現在は自転車通っている。彼は名古屋の私立大学の中退生であるが、今後どのように自らの進路を自分の力で切り開いていくのか楽しみだ。

姫路市の森下神経クリニックの森下一先生(不登校生のための学園で知られる生野学園の創設者)のご紹介でビバに来た若者は過去にも数人いたが、最近久しぶりに兵庫県からの若者を迎えた。彼はこれまで一度も働いたことがないとの事だったが、ビバでの短い生活で全てのプログラムに全力で取り組み、目を見張るような変化を遂げた。とされているうちに自分でハローワークに行き、ビバのモンガク農場の近くの農家の求人を見つけてきた。面接にも見事に合格し、農家の方が「きつい仕事だから、まず1日来て、少し休んでからまた来るようにしても良いよ。」といわれたにもかかわらず、すでにもう今日で10日間1日の休みもなく働き続けている。毎日彼が仕事から帰るとわたしたちはその日の仕事の様子と明日も行けるのかを聞いているが、こんなに続いているの一番びっくりしているのは、本人自身かもしれない。無事に1ヶ月続けてくれたら、うれしい便りを森下先生とご両親にぜひお伝えしたいと今から期待している。

ビバのメンバーとして札幌から来て、引き続き、森康彦さんの2代目のような形で、ビバのボランティアスタッフとして、長く頑張ってくれた北川諒さんを今日次のステップの大学受験のため送り出した。

今まで専任スタッフは坪内主任指導員1名のみであったが、この8日から、専任指導員として28歳の高崎高平さん(江別市)を迎えることになった。

